

Title	図書館情報学用語の出来事構造をめぐって
Author(s)	中田, 一志
Citation	日本語・日本文化. 2003, 29, p. 67-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7854
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

<研究論文>

図書館情報学用語の出来事構造をめぐって

中田 一志

はじめに

言語はコミュニケーションの道具だとよく言われる。道具は発展過程において、より効率よくその目的を遂行するように洗練されるのが常である。左利き用の道具は左利きのために進化しているので、同じような外観、同じ機能を持っていても右利きには使いにくい。日本語という言語もそれを母語とする日本人にとって目的(=伝達)を遂行しやすいように形作られていると考えることができよう。たとえば「切っても切れない」という表現は日本語では可能であるが、英語ではそれは意味をなさない。日本語の他動詞は結果よりもその過程を重視するので、この表現は文法的であるが、英語のそれは結果を重視するので「切る」と「切れない」は相矛盾するというわけである。このことは両言語間の段落構成法にも当てはまり、日本語の主張は段落の最後で、英語のそれは段落の最初であるというのが一般的でもある。

道具の仕様の差は日本語や英語といった言語間にだけ見られるのではない。特定の社会集団や専門領域で使う道具にも特徴が見られる。いわゆる集団語や専門用語と呼ばれる言語である。集団語には若者言葉や職業語など特定の集団で使用される用語である¹⁾。専門用語の方は特定分野における共通言語という意味では集団語とそうかわりはないが、複雑な専門知識を背景として成り立っているところが異なるところであろう。

日本人が日本語で専門を学ぶときには専門知識とそれに密接に関連する用語を学べばよいが、留学生が日本語で専門を学ぶときにはそうたやすくはない。外国語という道具の使い方と、外観は見分けがつかないほど酷似しているが仕様の異なった道具の使い方を習得しなければならないからである。しかも専門知識を学

びながらである。本稿はこのような留学生に対して言語学的な分析結果をどう有効に利用できるかという課題の一端を担っている。

専門知識が専門用語の語構造に大きく影響を与えているということはケーススタディとして行った拙稿(2002)で示した。そこでは証券用語を取りあげた。証券取引という分野では「市場」での「投資家」の「株」の「売り/買い」とその反映である「価格」という図式が核で、この図式と証券用語の語構成が極めて関与的であることを見た。たとえば、証券用語の「買い戻す」は一般の「お金を払って手放した物をもう一度自分の物にする」といった意味ではなくて、「株を買って株価を戻す」という意味である。これを理解するためにはこの分野に基本的な出来事と出来事の関係構造(以下、出来事構造)が思い描がれていなければならない。

今回取りあげる分野は図書館情報学である。もともと図書館学という名称であったが、情報関連の分野が新しく拡大し発展した結果、名称変更したという背景を持っている。用語集は『学術用語集 図書館情報学編』を用いる。参考に『学術用語集 図書館学編』との刊行年と収録語数をあげておく。

『学術用語集 図書館情報学編』 1997年刊行 収録語数約2,100語

『学術用語集 図書館学編』 1958年刊行 収録語数約3,700語

『図書館情報学編』の用語の内訳は、そのままもしくは修正して採録されたものが約860語、新規採録されたものが約1,240語である。大幅な入れ替えがあったことから、証券用語ほどこの分野特有の出来事構造を用語から計り知ることが困難であろうということがうかがえる。

図書館用語の分析例

専門用語の分析を行った研究に石井(1989)、野村・石井(1997)がある。石井(1989)は『学術用語集』の23分野を調査の対象にして、専門用語を構成する成分に一般語の使用率が高いことを実証的に示した研究である。ここでの「一般語」は『分類語彙表』にあるものがそれと見なされる。その中で図書館学用語は次のように特徴づけられる。

図書館学：用語数 3,512 語

	造語成分	「一般」の造語成分	「一般」の造語成分の割合
(延べ)	7,959 語	6,660 語	83.7%
(異なり)	2,249 語	1,618 語	71.9%

そして図書館学用語で頻繁に使用される「一般語」として次のものがあげられている。

図書、館、目録、カード、者、フィルム、版、紙、法、貸出

野村・石井 (1997) は専門用語を構成する基幹語基・準基幹語基を抽出し、これらの語基以外で特定の分野に頻出する特徴語基を抽出しようという研究である。まず図書館用語の特徴はつぎのように描かれている。

図書館学：異なり語基数 2,249 語

語種の割合

和語	漢語	外来語	混種語
16.1%	66.5%	18.1%	0.4%

(参考)

23分野全体：異なり語基数 19,853 語

語種の割合

和語	漢語	外来語	混種語
10.0%	59.6%	30.1%	0.4%

そして「基幹語基」として『学術用語集』23分野中17分野以上の広い分野で使用され、かつ各分野においても使用率(造語力)が高いものが選ばれ、おのおの分野で(準)基幹語基²⁾を除いて使用率の高いものが特徴語基として選ばれる。図書館学用語の特徴語基は次の通りである。

貸し出し、製本、著者、索引、帯出、閲覧、表題、刊行、件名、書架、表紙、集、標目、書名、コピー、書目、著作、券、判、文庫、見出し、細目、分館、文献、返納、ABC、会、寄贈、団体、点字、館員、小説、そう書、蔵書、注記、文書、記事、購入、司書、抄録、政府、刊、装

これら2つの研究から、図書館用語を構成する要素は一般語が多く、その中でも漢語が比較的多いという特徴を持っているということがうかがえる。

和語用語の利用

和語は漢語と比べると生産性が低い。意味的、構造的な制約が強いからである。拙稿 (2002) のように、複合動詞やその転成名詞の可能な語構成の類型を見ることはその専門の出来事構造を説明するのに有意義である。しかしながら統計的にも図書館用語には和語が少なく、さらに図書館情報学用語に至ってはさらに大幅な和語の減少が見られる。次にあげるのは『図書館学編』に収録されていたが『図書館情報学編』で採録されなかった和語成分による複合動詞もしくはその転成名詞を含む用語である。参考のために英語訳を括弧内にあげておく。

はり込み (paste-in)、はり付け標本 (mounted samples)、走り読みをする (to skin [through]; to skin [through] a book)、引き抜く (to discard; to weed out)、引落とし (pull-down)、書入れ (interpolation in a text; insertion in a text; intercalation in a text)、重なり合い模様 (imbrication)、飾り書き (flourish)、切込み (notch)、組置き (keep standing)、組付け (imposition)、繰込語 (filing word)、くり抜き活字類 (mortise)、巻き返す (to rewind)、巻取りール (take-up reel)、見切本 (book bargains)、流れぼけ (stretch)、抜書き (extract; excerpt)、しばり付け (tying up)、しめつけ (cinching)、すえおき書だな (floor case)、すき放し (deckle-edged paper)、刷り上がり (copy in sheets)、すりきれ (wear and tear)、刷りそこない (mackling)、刷過ぎ本 (overplus; surplus copies)、裁切り (bled)、裁込み (cropped)、裁落とし紙 (offcut)、とりなおし (retake)、とじはずれ (start)、とじ込み (bind in)、つりあわせ (counter balance)、つづり込み (filing)、浮出し印 (die stamp)、割込み注 (cut-in note; cut-in side note; let-in note; incut note)、割りもどし (rebate)、割付 (arrangement; layout; casting off)、ずれ裁ち (badly trimmed)

次にあげるのは『図書館学編』に収録されており、引き続き『図書館情報学編』にも採録された和語成分による複合動詞もしくはその転成名詞を含む用語である。

受入 (accession)、打抜きとじ (stab stitching)、折込み図版 (folded plate)、貸出 (loan; lending; circulation)、切抜資料 (clipping file)、投出し (throw-out)、抜刷 (offprint)、見返し (endpaper)、見出し (caption)、見計らい方式 (approval

plan)、見開き (opening)

次は新たに『図書館情報学編』で採録されなかった和語成分による複合動詞もしくはその転成名詞を含む用語である。

買切り制 (non-returnable purchase)、突付け (tight joint)、取り合わせ本 (made up copy)、見せ消ち (英訳なし)、読み聞かせ (book reading service)、寄合書き (multiple handwriting)

これらは和語成分による複合動詞もしくはその転成名詞の例であるが、全体としても新旧交代により和語成分が極端に減少したことは言うまでもない。したがって和語用語から図書館情報学用語の分析をするのは困難であると結論づけざるを得ない。

漢語用語の利用

漢語は和語に比べると生産性が高いことは周知の通りである。それゆえ漢語の構成には意味的・構造的な制約が希薄であることは承知しなければならない³⁾。したがって漢語用語の構造から出来事構造を見いだすのが困難であるように思われる。しかし漢語一字一字が概念的な意味を持つという立場に立つと、漢字用語はその概念の合成であると考えられる。となるとその分野で使用頻度の高い漢字は出来事構造に深く関わっている可能性があるはずである。

野村・石井 (1997) は基幹語基 (現代語で意味を担った最小の言語単位) を設定する際、和語や外来語の語基は一最小単位を一語基と認定するだけでよいのに対して、漢語の語基はもう少し複雑な扱いをしている。漢字の場合、最小の言語単位は漢字一字に対応するだろうが、一語で独立語となれるものが少ないので、そこでは次のように計らっている。

漢語の語基：最小単位どうしの一次結合形を一語基とし、それ以上の高次の結合形、および和語・外来語語基に前後から結合する最小単位はそれを一語基とする。

すなわち「製本」「著者」「索引」などは一次結合形として一語基と認定され、「装」「判」「券」などの漢字一字語基は「粘葉装」「タブロイド判」「貸出券」の高次結合形の結合の仕方から認定されているわけである。

このようにある種の構造分析をして認定することは語基数を計量的に分析する際には不可欠であろう。しかしわれわれの目的は図書館情報学という学問がどんな出来事構造を持っているかということにある。したがって最初に構造的な解析を行うことをしない。表1は『図書館情報学編』の総用語約2,120語(外来語のみの用語も含む)を単漢字に分解して各単漢字の出現回数(a)とその漢字の使用率(b)(単漢字の出現回数÷総延べ単漢字数⁴⁾ 6,900×100)のリストである。

表1

単漢字	a (回)	b (%)
書	417	6.04
図	229	3.32
館	195	2.83
本	112	1.62
記	108	1.57
分	96	1.39
版	90	1.30
索	89	1.29
法	84	1.22
目	83	1.20
出	81	1.17
録	81	1.17
料	78	1.13
誌	76	1.10
学	76	1.10
者	76	1.10
資	75	1.09

表2

英単語	a (回)	b (%)
library	211	4.66
of	108	2.39
book	104	2.30
service	66	1.46
title	62	1.37
system	48	1.06

用語集には日本語の用語に対応する形で英語訳が記載されている。表2は総用語約2,120語を英単語レベルに分解して各英単語の出現回数(a)とその英単語の使用率(b)(英単語の出現回数÷総延べ英単語数⁵⁾ 4,528×100)のリストである。

『図書館情報学編』では新たに専門を専門部門として細分化を行っている。次にあげるのがそれである。

- A) 図書館情報学全般 (39 語) : 図書館情報学全般にわたる用語を中心として、さらに隣接領域、基礎となる概念、法則などの用語
- B) 図書館情報学教育 (13 語) : 図書館情報学の教育に関する用語
- C) 図書館 (691 語) : 図書館、情報センターについて、種類、法及び基準、管理運営、コレクションの構築、資料及び情報の提供、保存、図書館などの建築、施設、設備、並びに読書に係る用語
- D) 目録 (274 語) : 目録の概念、種類及び構成、目録法並びに規則の用語
- E) 分類 (168 語) : 分類の概念及び種類、分類法、件名目録法に係る用語
- F) 索引・検索 (205 語) : 索引の概念、種類、索引法、検索手法、データベース、抄録法に係る用語
- G) 資料・メディア (517 語) : 資料及びメディアについて、種類、構成要素、出版と刊行、印刷、製本に関する用語
- H) 書誌学 (196 語) : 図書館に関する書誌学関係用語

表3はそれぞれの部門の用語において使用されている単漢字の出現回数 (a) とその部門におけるその単漢字の使用率 (b) (単漢字の出現回数÷その部門における延べ単漢字数×100) と図書館情報学用語全体の中でのその単漢字の使用率 (c) (単漢字の出現回数÷図書館情報学用語全体における単漢字の出現回数 (表1のa) ×100) からなっている。すなわち (b) は部門での重要度の目安であり、(c) は学問の中での重要度を示す目安となっている。特に (b) の数字が高いものは各部門のタイトルに含まれる単漢字であるか、それに密接に関連する単漢字となっている。同様に (c) の数字が高いものはその部門での重要度の尺度となると推定できる。

つぎに部門ごとに使用率の高い単漢字を含む用語を抽出する。次にあげるのは部門 (D) 目録における単漢字「記」を含む用語の抽出例である。

(例) Dにおける“記”を含む用語：

分割記入、分類記入、分出記入、分出記録、分出注記、団体記入、フィールド終端記号、合綴注記、補記、補記タイトル、補記事項、付記、付記事項、副出記入、一括記入、一般注記、ISBD区切り記号、完結記入、簡略記入、形式記入、形態的記述エリア、基本記入、基本記入方式、基本記入標目、記入、

記入語、記述、記述独立方式、記述目録法、記述の基礎、記述のレベル、記述対象、記述ユニット方式、国際標準書誌記述、個人名記入、未完記入、目録記入、内容注記、レコード終端記号、シリーズ記入、書誌記述、所在記号、所蔵注記、多段階記述様式、タイトル基本記入、タイトル記入、単一記入制、定型注記、著者基本記入、著者記入、注記、注記エリア (以上、52 語)

ここではじめて語構成に関して考えてみる。単漢字が単概念を表すとすると、共通の単漢字を含む複合漢字は共通の概念を含んでいるということが言える。これは後で見ると必ずしもそうでない例もある。あくまで単純な処理からできるだけ有意義な結果を得ることを目的にしているので、ある程度の錯誤は承知のことである。たとえば上の例からは記入 (23 語)、記述 (11 語)、注記 (8 語)、記号 (4 語)、補記 (3 語)、付記 (2 語) の複合漢字を抽出することができ、それぞれ意味的な関連性をもちかつ「目録」という部門で重要語であることがうかがえる。括弧内はその部門におけるその複合漢字の出現回数を表している。

このよう部門の単漢字ごとにその単漢字を含む用語を抽出し、そのなかから使用頻度の高い複合漢字のリストを抽出した。次にあげるのがその代表的なものである。

A) 図書館情報学全般

“書”	書誌 (6)、図書 (3)
“情”	情報 (9)
“報”	情報 (9)
“誌”	書誌 (6)
“図”	図書 (4)
“法”	法則 (3)
“館”	図書館 (3)
“則”	法則 (3)

B) 図書館情報学教育

“書”	図書 (7)、司書 (3)
“館”	図書館 (7)
“図”	図書 (7)

- “育” 教育 (4)
“学” 学校 (2)
“教” 教育 (4)
“司” 司書 (3)

C) 図書館

- “書” 図書 (179)、読書 (18)、蔵書 (14)、書架 (13)、書庫 (7)、司書 (6)、文書 (2)、収書 (2)
“図” 図書 (179)
“館” 図書館 (156)、分館 (3)、開館 (3)、入館 (3)
“料” 資料 (44)、有料 (2)
“出” 貸出 (43)
“資” 資料 (44)
“学” 大学 (10)、学校 (9)、学習 (5)
“貸” 貸出 (43)
“用” 利用 (32)

D) 目録

- “記” 記入 (23)、記述 (11)、注記 (8)、記号 (4)、補記 (3)、付記 (2)
“目” 目録 (37)、標目 (12)
“録” 目録 (37)
“書” 書誌 (15)、書名 (8)
“入” 記入 (23)
“名” 件名 (4)、名称 (2)、著者名 (2)
“者” 著者 (13)
“標” 標目 (12)、標題 (4)
“著” 著者 (13)、著作 (3)
“分” 分類 (4)、部分 (3)、分出 (3)、分割 (2)

E) 分類

- “分” 分類 (47)、区分 (9)、分析 (3)
“類” 分類 (9)

- “法” 分類法 (21)、記号法 (9)
- “記” 記号 (21)、助記 (4)
- “号” 記号 (21)
- “目” 標目 (8)、細目 (5)
- “表” 記号表 (2)
- “名” 件名 (13)
- “合” 合成 (4)、複合 (3)、混合 (3)

F) 索引・検索

- “索” 索引 (38)、検索 (36)
- “引” 索引 (38)
- “検” 検索 (36)
- “語” 語彙 (4)、言語 (4)、索引語 (2)、優先語 (2)、上位語 (2)
- “関” 関係 (7)、機関 (2)*、関連 (2)
- “録” 抄録 (9)
- “者” 著者 (3)、利用者 (2)、作成者 (2)
- “抄” 抄録 (9)
- “事” 記事* (2)、事後 (2)、事前 (2)
- “探” 探索 (8)

G) 資料・メディア

- “書” 書誌 (19)、図書 (13)、辞書 (13)、書評 (4)、文書 (3)、報告書 (2)、古書 (2)、教科書 (2)、書店 (2)
- “版” 出版 (18)、図版 (2)
- “誌” 雑誌 (8)
- “刊” 刊行 (5)、月刊 (4)、週刊 (4)、年刊 (3)、定期刊 (2)、近刊 (2)
- “図” 図書 (13)、地図 (5)、挿図 (2)、図版 (2)
- “料” 資料 (24)
- “資” 資料 (24)
- “本” 製本 (7)、絵本 (3)、完本 (2)
- “者” 著者 (4)、出版者 (2)

“文” 論文 (7)、文献 (5)、文書 (3)

H) 書誌学

“本” 活字本 (3)、写本 (3)

“版” 木版 (2)

“書” 蔵書 (2)

“題” 外題 (4)、題簽 (3)

“木” 木版 (4)、木活字 (2)

“字” 活字 (5)

*印の複合漢字は他の複合漢字と意味的な関連性が希薄なものを示している。こうしてみるとある程度の精度で重要な用語でかつ関連性のある出来事と出来事を浮き彫りにする用語が抽出されていることが分かる。

専門用語から基本となる出来事と出来事の関連構造に係わる用語を抽出するのに共通の単漢字を頼りに複合漢字を抽出する以外に、共通の単漢字を含み、かつ同じ語構造持っている用語を抽出するのも有益である。次にあげるのはその代表的な抽出例である。

A) 図書館情報学全般

“学” 書誌学、情報学、図書館学

“権” アクセス権、学習権、複製権、著作権

B) 図書館情報学教育

なし

C) 図書館

“書” 貴重書、適書、蔵書

“館” 書籍館、中央館、自館

“料” 延滞料、入館料

“学” 医学、農学

“用” 患者用、貸出用、研究用

D) 目録

“名” 原書名、本書名、副書名、簡略書名

“者” 演技者、頒布者、印刷者、製本者、制作者、出版者

E) 分類

“表” 分類表、標目表、補助表、主表

F) 索引・検索

“語” 下位語、関連語、検索語、探索語、頭字語、用語

“法” 索引法、自動抄録法、事前結合検索法

G) 資料・メディア

“書” 外国書、参考書、学術書、娯楽書、白書、一般書、近刊書、貴重書、古文書、共著書、教養書、類書、青書、専門書、新刊書、新書判、叢書、書簡、書店、単行書、和書、洋書、実用書

“版” 文庫版、限定版、グラ版、豪華版、普及版、改訂版、海賊版、簡略版、教科書版、大型版、凹版、再版、最新版、製版、石版印刷、市販版、私家版、初版、縮刷版、多言語版、凸版、謄写版、図書館版、予備版、絶版、増補版、増訂版

“誌” 同人誌、月刊誌、一般誌、一次書誌、一次雑誌、機関誌、広報誌、目次速報誌、PR誌、レビュー誌、レター誌、索引誌、専門誌、書評誌、抄録誌、週刊誌、情報誌

“刊” 廃刊、復刊、季刊、休刊、日刊、増刊、続刊、旬刊

“図” 海図、掛図

“本” 古本、仮とじ本、枅型本、未完本、冊子本、定本、在庫本

“者” 原作者、発行者、纂者、編集者、编者、翻訳者、評注者、印刷者マーク、監修者、監訳者、寄稿者、校訂者、共著者、書評者

H) 書誌学

“本” 絵入本、合刻本、原装本、現存本、端本、版下本、補刻本、本文批判、本綴じ、複製本、二つ切り本、評注本、異本、改題本、改装本、卷子本、加点本、欠本、金石本、古版本、小本、孤本、校訂本、訓点本、求版本、豆本、美濃判本、三つ切り本、木版本、無刊記本、大本、彩飾本、線装本、宸筆本、祖本、手摺本、拓本、縦長本、底本、取り合わせ本、朝鮮本、中本、薄様本、和刻本、和装本、横長本、洋装本、四半本、四つ折り本、自筆本

“版”	江戸版、原版、元版、五山版、版経、藩版、版式、版心、版下本、異版、上方版、官版、古版本、求版本、町版、乱版、明版、削除版、石版画、宋版、集注版、勅版、寺院版、蔵版
“書”	偽書、帛書、逸書、希書、首書、小口書き、奥書
“装”	粘葉装、原装本、包背装、改装本、線装本、装飾経、綴葉装、和装本、洋装本、帖装
“綴”	合綴、本綴じ、袋綴じ、五つ目綴じ、手綴じ、打抜き綴じ、大和綴じ、四つ目綴じ
“紙”	外題紙、板表紙、局紙、間似合紙、入紙、料紙、竹紙、和紙

共通の単漢字を含み、かつ同じ語構造をもつ用語はその専門の中で重要な概念の一つであると考えられる。たとえば部門 (G) 資料・メディアの「刊」がそうである。「刊行」という出来事の下位概念として「廃刊、復刊、季刊、休刊、日刊、増刊、続刊、旬刊」が位置づけられる。しかしながら単漢字をもとに抽出しているの、漢字の読みが異なり意味的にも異なる単漢字を区別することはできないという欠点も認めざるを得ない。少数ではあるが、たとえば部門 (H) の「書」がその例である。「偽書、帛書、逸書、希書」の「書」はいずれも読みは「しよ」であり、「首書、小口書き、奥書」の「書」はいずれも読みは「がき」である。

まとめ

本稿は、図書館情報学用語の言語的特徴を概観し、その特徴から漢語を利用することでその専門知識に関わる事柄を言語学的な分析から抜き出すという方法をとった。漢字用語がもつ概念を単漢字がもつ単概念の合成として捉え、出現回数が高い単漢字、単概念がその分野で重要な事柄であると見なした。そしてその単概念を含む用語を抽出した。抽出された用語は予測どおりある程度お互に関連性があることが確認された。さらに専門的な立場から区別が必要な用語は同じ単概念を有し、かつ同じ語構造を持っていると見なした。

専門用語の頻度をもとにその専門の特徴づけを行うという先行研究や調査では重要語句や概念をうかがい知ることができるが、本研究でも単漢字がもつ単概念の統計からそれが可能で、さらにその単概念の合成概念とその構造から動的な関

連語句を抽出することができるという結論に達した。

終わりに

本稿は、専門用語の言語的分析をすることによってある程度専門分野における重要な体系が見えてくるということを示した。このことは単に「日本語の問題」として専門の分野からないがしろにされ、また日本語教育が入り込めなかった領域が、日本語を学びながら専門を履修しなければならない留学生にとって有意義なものであるということを示唆するものであろう。

註

- 1) このことについては米川明彦編 (2000) が詳しい。
- 2) 野村・石井 (1997) の基幹語基と準基幹語彙は次の通りである。

基幹語基 (66 語) :

線、器、性、法、学、計、形 (カタ)、二、体、機、放射、面、式、率、管、的、数、角、三、点、度、一、不、装置、係数、図、量、化、系、熱、非、型 (カタ)、力、回転、次、重、分析、平均、室、層、運動、吸収、曲線、帯、標準、物、効果、時間、中心、安定、結合、形 (ケイ)、構造、作用、軸、反射、比、連続、写真、定数、完全、固定、周期、計算、選択、流、

準基幹語基 (68 語) :

小、発生、化学、条件、状態、測定、調和、状、距離、分離、横 (ヨコ)、第、値、光、大、水 (ミズ)、子 (コ)、縦 (タテ)、板 (イタ)、部分、密度、台、極、限界、平衡、部、半、無、位置、入り、交換、垂直、永久、循環、絶対、単位、超、間接、混合、主、相対、表、基本、最大、自然、逆、直接、自由、グラフ、複合、移動、傾斜、再、全、内部、副、有効、圧、域、中、中間、分、分布、合成、固有、最小、微、分解

- 3) このことについてはワカバヤシ (1936) が詳しい。
- 4) 約 2, 120 語の日本語の用語 (カタカナ語のみの用語も含むが) を構成するのに必要な異なり単漢字数は 775 語である。また総用語数には外来語のみからなる用語も含むが統計処理上省かずに数えてある。
- 5) 約 2, 120 の英語の用語を構成するのに必要な異なり英単語数は 1, 430 語である。

用語集

- 文部省編 (1958) 『学術用語集 図書館学編』大日本図書
文部省編 (1997) 『学術用語集 図書館情報学編』丸善

参考文献

- 石井正彦 (1989) 「専門用語の語構成」『日本語学』8-4 明治書院
影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版
阪倉篤義 (1957) 「語構成序説」『日本語文法講座1 総論』明治書院 (斎藤倫明・石井正彦編『日本語研究資料集 語構成』ひつじ書房に再録)
中田一志 (2002) 「証券用語の言語学的覚え書き」『日本語・日本文化』28 大阪外国語大学留学生日本語教育センター
野村雅昭・石井正彦 (1997) 「学術用語の量的構造」『日本語学』16-2 明治書院
米川明彦編 (2000) 『集団語辞典』東京堂出版
ワカバヤシマサオ (1936) 『漢語ノ組立ト云イカエノ研究』ナカヤ (斎藤倫明・石井正彦編『日本語研究資料集 語構成』ひつじ書房に再録)

本研究は平成14年度科学研究費補助金若手研究(B)の成果の一部である。単漢字および英単語を数えるソフトウェアの開発にあたっては、Kyoto Software Research, Inc.のNguyen Hai Ha氏にご協力を願った。記して感謝申し上げる次第である。

〈キーワード〉 図書館情報学, 専門用語, 語構成, 漢語用語

On Scientific Terms in the Field of Library Information Science: A Case Study of Linking Language Study with Another Field of Study

Hitoshi NAKATA

This paper aims to advocate a linguistic way to extract academic knowledge and its related matters from scientific terms, especially from Library Information Science. This project will, as a result, link language study with another field of study. By analysing the feature of Chinese characters' ability to represent concepts, the more frequently used characters will be considered for their importance in the field of study. The relationship of terms using these particular Chinese characters will be shown, as well as the characteristics of their use in word formation. Thus we can appreciate their importance for use in the field of classification.